

# INSIDE CUBE

2016  
Vol.14

[巻頭特集]

## 子どもを守り 育てるICT

毎日の授業でどこでもタブレット端末

ICT NOW

## 「No UI」は ICTの究極の進化か？

MKI info

すっきりMKI

編集後記

MKIの“今”と“未来”をお伝えする情報誌  
**INSIDE CUBE**



※記載されている会社名および製品名は各社の商標または登録商標です。※記載された内容は変更する場合がございますのでご了承ください。

お問い合わせ先

 **MKI** 三井情報株式会社

〒105-6215 東京都港区愛宕2-5-1 愛宕グリーンヒルズMORIタワー  
E-Mail: [press@ml.mki.co.jp](mailto:press@ml.mki.co.jp)

製品・サービスサイト: <http://www.mki.co.jp/biz/> コーポレートサイト: <http://www.mki.co.jp/>

三井情報株式会社



【巻頭特集】

# 子どもを守り 育てるICT

女性の社会進出を推し進め、少子高齢化社会の進行に歯止めをかけたいわが国にとって、子育て支援は重要な課題だ。ここでも現状打破のカギを握るのはICT。MKIは、世界の子育て現場を変えている「きっずノート」を日本にもたらした。

女性の社会進出が重要政策とされる中であって、日本では子育て支援の重要性が高まっている。これ以上の少子高齢化社会の進行に歯止めをかけるとともに、国の未来を背負う存在でありながら何かとしわ寄せが行きやすい子どもたちを守るためにも最優先で取り組むべき課題だ。

この分野でも現状打破のカギを握るのがICTだ。そのリアルタイム性、スピード、ネットワーク力などを生かすことによって、子どもたちや彼らを育てる保護者へのサポートを点から線に、線から面に広げることができる。

MKIでは、その取り組みの一つとして、保護者と幼稚園・保育園との連絡帳アプリ「きっずノート」を日本に初めて導入した。

これは、日ごろ幼稚園・保育園・認定こども園と保護者の間で行わ

れている、子どもに関する情報のやり取りや、園からのお知らせなどを電子化し、スマートデバイスやPCから簡単に情報共有できるサービスだ。事前にこのアプリを普段利用するスマートデバイスやPCにインストールしておくだけで、家庭や園だけでなく外出先からでも子どもの様子を把握でき、文章だけではなく写真やビデオを添付して視覚的に伝えることができる。子ども一人一人の個性に合わせた保育の実現にも効果的だ。

このアプリは、2012年4月に設立された韓国 Kids Note, Inc.によって開発され、この3年半の間にすでに世界で約25,000の保育施設、約70万人の保護者に利用されるまでになっている。日本での活用最前線を追いかけた。

## Contents

03 【巻頭特集】

### 子どもを守り 育てるICT

毎日の授業でどこでもタブレット端末

07 ICT NOW

### 「No UI」は ICTの究極の進化か？

10 MKI info

11 すっきりMKI

編集後記

お問い合わせ先

**三井情報株式会社**

経営企画部 戦略企画室 広報グループ

TEL:03-6376-1008

E-mail:press@ml.mki.co.jp

本誌に記載の内容は2016年3月現在のものであり、時間の経過または様々な後発事象によって変更される可能性がありますことをご了承ください。

### 町全体で 子どもを育てる保育園

東京都中央区人形町。江戸の情緒がそこはかとなく残る町の中に「まちのてらこや」はある。オフィスビルの一角ながら、入口には老舗を思わせる商標入りの黄色いのれん。室内も木と畳が取り入れられた和風のしつらいで、明るくなごめる空間となっている。ここは、どこか懐かしくて新しい子どもたちの居場所だ。小規模の保育園と学童保育を併設しており、「まちのみんが先生で、まち全体が保育園」というコンセプトのもと、町全体で子どもたちの成長をサポートすることをめざしている。

代表を務めるのは、新進気鋭の起業家 高原友美氏だ。同氏は幼いときから紛争や貧困で苦しむ人々を助けたいという思いが強かった。産業や仕事を作り出すことでそうした国々をサポートしようと三井物産に入社した。同社ではブラジルの金属工場の経営支援や新規鉱山開発に従

事、産業創出で街が劇的に発展するさまを目の当たりにして感銘を受けたという。

その一方で同氏は日本の未来にも思いをはせていた。この先この国をもっと良くするにはどうしたらよいかを考える中で目をむけたのが、女性の社会進出や仕事と育児の両立という課題だった。そこで、町全体で子育てにかかわることで働く女性をサポートする「まちのてらこや」を構想した。

2015年9月、まちのてらこや保育園を開設。朝の準備が大変な他の保育園と異なり、両親は手ぶらで子どもを預けられ、また街の人々と子供たちが積極的に交流するというこれまでにない特徴も話題を呼んで、開園やいなや続々と入園希望

が寄せられた。現在、高原氏自らも保育の現場で子どもたちと触れ合う忙しい日々を送っている。

### 「きっずノート」で リアルタイム交流を

保育園には、子どもの保護者とコミュニケーションを図るために連絡帳という仕組みがある。これは、子どもを預けるときにその日の体調や様子を保育士へ報告したり、保育園から園での子供たちの様子を保護者に報告するものだ。

これまで連絡帳といえば文字どおり紙でやりとりされていたが、高原氏は「まちのてらこや」開園にあたってMKIの提供

する連絡帳アプリ「きっずノート」を採用した。高原氏はその理由を次のように語る。

「『まちのてらこや』を立ち上げる前、経験を積むために別の保育園で実習を行っていたのですが、紙の連絡帳だと、朝保護者から保育園に提出いただいて、夕方保育園から保護者にお返しするといった具合に、一日一往復しかできません。でも、毎日ご報告したいことはもっとたくさんあるんですよね。それもリアルタイムにです。

たとえば健康の問題。子どもの体調は変化しやすいので、朝、子どもの調子が少しよくなかったとしたら、その後どうなったか保護者はずっと心配だと思いますし、園で毎日どのような昼食やおやつを食べているか、元気に遊んでいるかといったところも気になる場所だと思います。

こうしたアプリを使えば写真つきでその場その場で送ることができますし、LINEのように往復を繰り返すやりとりも可能です。保護者の方も、電話だと仕事場では出にくいかもしれませんが、スマートフォンやタブレット端末を通じたメッセージなら、すきま時間に見ただけらと思えました」

また、別の理由として高原氏が前職時代からICTになじみ、その利便性を引き続き保育の世界でも生かしたいと思っていたこともある。また、子どもたちの保護者もすでにデジタル世代で、ICTを使ったコミュニケーションに支障がなかったことも同氏の背中を押したという。



紙の連絡帳と違い、保護者とリアルタイムにやりとりできる点が魅力

当時、類似する製品やサービスは他に存在せず、「きっずノート」はこれまでになかったコミュニケーションを可能にするツールとして「まちのてらこや」に選ばれたのだった。

### 「きっずノート」の概要

それでは「きっずノート」とは具体的にどのようなアプリケーションなのか。

画面①は、「きっずノート」トップのサンプル画面だ。連絡帳、お知らせ、アルバム、カレンダー、本日の食事、文書などの機能で構成されている。

連絡帳は、これまでの紙の連絡帳に替えて保護者と保育園や幼稚園の間での相互報告に利用できる。ここでは、機嫌や体調などルーティン項目に関してドロ

手間が極力省けるようになっている(画面②)。連絡帳にはまた画像を添付することが可能で、園での子どもの様子や特に画面で伝えたいことなどをいつでも保護者に送信することができる(画面③)。

お知らせは、園からの一斉同報機能だ。伝えたい内容が簡単に入力可能で、送信先も、全園児の保護者、特定クラスの保護者など、柔軟に設定できる(画面④・画面⑤)。ここで遠足などイベント情報が入力された場合、その情報はカレンダー機能にも反映される。

一方、アルバムは子どもたちの写真を保護者へ共有できる機能である。スマートフォンなどで撮った写真を簡単にアップロードでき、子どもたちのとおきの表情やしぐさをリアルタイムに保護者に伝えられる。

## 町全体で子どもたちの成長をサポートする という、ユニークなコンセプトを持つ 東京・人形町の「まちのてらこや」。 同園では開園にあたって連絡帳アプリ 「きっずノート」を採用、保護者と園の間 でリアルタイムかつ視覚的な情報共有 を実現させた。



## 毎日の授業でどこでもタブレット端末

埼玉県上尾市教育委員会は、子どもたちの理解力向上にタブレット端末を積極活用しようと、モデル校である上尾市立中央小学校に校内無線LAN敷設を決定。そのシステムインテグレータとして教育現場で高い導入実績を誇るMKIが選ばれた。同小学校では、「MKIマネージドWi-Fi」導入によりタブレット端末が縦横無尽の機動力を発揮。これまでになかった新しい学習指導活動を可能にしている。

### コンピュータ教室にしばられた タブレット端末

近年、文部科学省は教科指導でのICT活用に力を入れており、それを受けて地方自治体でも新しい教育への取り組みが進んでいる。埼玉県上尾市教育委員会も例外ではなく、市内の全小学校では、2013年度、コンピュータ教室のノートPC(40台)から着脱型タブレット端末へとリプレースした。ただ、当時は校内に無線LAN環境が整備されていなかったため、コンピュータ教室から持ち出しての利用には不便が伴った。

2015年度、同教育委員会は10月に予定されている公開授業でタブレット端末を本格的に活用することを決め、校内無線LAN構築についての調査を始めた。そこで浮上したのが、この分野の無線LAN構築で高い実績を積んでいるMKIの名前だった。現在まですでに全国100近い小・中学校に無線LANを導入。それは教育現場ならではのニーズを熟知して、かゆいところに手が届く設計が可能だからだった。授業では、その開始とともに生徒が一斉



にログインし、教師が一斉に教材を配布したりする。データトラフィックの集中度や容量が企業利用の比ではない。

今回MKIは、アクセスポイントや月1回のレポート提供なども包含したクラウド型無線LANサービス「MKIマネージドWi-Fi」による実証実験(1年間)を申し出た。上尾市教育委員会はこうした提案内容を評価、モデル校として上尾市立中央小学校での導入を決定した。

### 「MKIマネージドWi-Fi」導入で タブレット端末が大活躍

2015年10月に行われた公開授業では、5年生が理科の授業で流水の観察とそのグループ発表にタブレットを活用した。その後も、高学年の授業では5教科の通常授業やグループワークに、低学年の授業では動画の閲覧などにと、タブレット端末が校内で大活躍している。中央小学校や教育委員会は、無線LANによりタブレット端末が高い機動力を発揮可能になり、子どもたちの授

業への理解力向上に貢献していると評価している。三井情報株式会社 通信・産業営業本部 情報通信第一営業部 第二営業室 室長 小島孝幸氏は次のように語る。

「小学校には専任のネットワーク管理者がいません。先生が授業で安心してタブレット端末を活用できるよう、『MKIマネージドWi-Fi』で無線LANをユーティリティのように使えるようしっかり監視しています。月1回のレポートは、いつどのようにタブレット端末が使われているか一目瞭然であるため、教育委員会が活用度をチェックするのに評価いただいています」

今後は体育の授業などでもスポーツのフォーム確認に使いたい、と校長先生。中央小学校では、実証実験終了後も引き続きこの環境を利用することが望まれている。また教育委員会では、期待したとおりの効果が得られていることから他の市内小中学校への展開を前向きに検討している。⑬



三井情報株式会社  
通信・産業営業本部  
情報通信第一営業部  
第二営業室 室長 小島 孝幸

に水平展開していく予定です。そのとき、私が代表としてすべての保育園の様子を網羅的につかもうとするなら、やはりこうしたアプリを駆使するのが一番です。ありがたいことにMKI担当者のサポートは手厚く、私たちの要望にも真剣に耳を傾けてくれるので、これからも『まちのてらこや』と『きっずノート』、一緒に成長していけたらいいですね(高原氏)

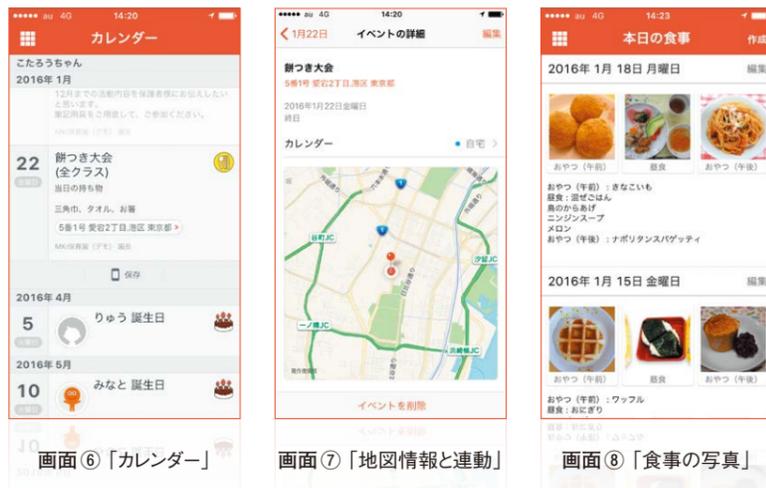
「きっずノート」が実現したのは、子どもを真ん中に置いた保護者と保育園間のリアルタイムかつ視覚的な情報リレーだ。閉鎖的になりがちだった日本の保育に、変化の兆しが育っている。⑭



まちのてらこや  
代表 高原 友美氏  
1984年生まれ、31歳。岡山県倉敷市出身。2007年3月、お茶の水女子大学卒業。2007年4月より7年間、三井物産株式会社に勤務。金属資源の輸出入、プラジルでの金属資源開発案件などを担当。2014年4月に退職し、6月に株式会社サムライウーマンを設立。



園の入口には道行く人の目を引く黄色いのれん



画面⑥「カレンダー」  
画面⑦「地図情報と連動」  
画面⑧「食事の写真」

カレンダーは、文字どおり園の予定を入力したり、子どもたちの誕生日を書き入れて備忘録とすることができる。入力する情報が住所を伴っている場合、それを地図情報として表示することも可能だ。(画面⑥・画面⑦)

本日の食事は、園で提供した食事を保護者に知らせる機能だ(画面⑧)。これもスマートフォンで撮った写真を簡単にアップロードできる。子どもの食事に関心の高い保護者は多く、重要な機能の一つとなっている。

### 保護者や祖父母から 感激の声

導入から約半年、「きっずノート」の利用は「まちのてらこや」の運営にどのような効果をもたらしているだろうか。

「保護者の方からはとても喜ばれています。特に写真つきでわが子の様子を毎日把握できるのは画期的、とおっしゃってくださいますね。遠くに住んでおられるおじいちゃん、おばあちゃんもきっずノートからお孫さんの写真を見れるんですよ。孫に会いたいけれどなかなか行き来は難しい、というケースは多いと思いますが、『スマートフォンで、日々孫の成長を確認できる!』と感激の声が届いています」

これらはまさにICTだから実現できるメリットだ。ただ、課題がまったくないというわけではない。これまで保育の世界では、あまりICTの導入が進んでこなかった。そのため、ベテランの保育士ほど紙の連

絡帳に慣れており、スマートフォンやタブレット端末の活用に関しては習熟の過程にあるのが現実だ。研修機会を持てればいいのだが、毎日多忙な保育士がそのための時間に確保するのは難しい。

### 「今後アプリの利用は 主流になる」

それでも、顧客満足度向上という観点から見れば、こうした連絡帳アプリの利用は今後主流になっていくと高原氏は見ている。将来的には保育園を比較するポイントともなる可能性もあるため、このまま使い続けていくというのが同氏の意向だ。

「また、今後『まちのてらこや』は徐々

<特集>  
「No UI」は  
ICTの究極の  
進化か?



ICTといえばユーザーインターフェース、その出来が製品やサービスの生死を決する。そう思われている方は多いのではないだろうか。しかし、ユーザーインターフェースに固執するがゆえに、かえって使い勝手を損なっているとしたら? ユーザーインターフェースに頼らなくても目的が果たせるなら、その方が近道だ。今回は「No UI (User Interface)」、ユーザーインターフェースに頼らずにブレークスルーを得ようという提案に耳を傾けてみた。

画面というUIへの依存が進む

どんどんモバイル端末が生活に入りこんでいる。総務省の平成26年通信利用動向調査によると、すでに30代以下の年齢層ではスマートフォンが自宅のパソコンを上回って、最も利用率が高い端末となった(図1)。

工業製品の世界にも、「画面化」の波は広がっている。家電量販店に行ってみればよくわかる。冷蔵庫に電子レンジ、液晶画面で操作する製品が増えている。自動車ですらそうだ。テスラモーターズの次世代電気自動車には、ダッシュボードにパソコン並みに大きな液晶画面が装備されており、運転状況をモニタリングするためのアプリが搭載されているという。

UI依存は本末転倒なのでは?

果たして、この画面依存の潮流は正しいのか。今、ここに警鐘をならしているのが米国のユーザーエクスペリエンスデザイナーで「The Best Interface is No Interface」(邦訳タイトル「さよなら、インターフェース 脱「画面」の思考法」)の筆者ゴールデン・クリシュナ氏だ。インターフェースに頼りすぎるのは、本末転倒になりかねないというのである。たとえば、スマートフォン一つで車のドアやエアコンなどいろいろな操作ができるというアプリケーション。便利なようで、ドアを開けるのに、スマートフォンを取り出す→起動→アプリを探す→起動→ドアオープンの機能を探す→ドアオープンボタンを押す、という一連の操作が必要

だ。手動ならドアノブを引くだけなのに。同氏はスマートフォン利用を否定しているわけではない。Bluetoothなどスマートフォンの持つ機能をうまく活用すれば、ユーザーがスマートフォンを操作しなくてもドアオープンが可能なのではないか。本当にユーザーフレンドリーな製品/サービス設計をめざそうではないかと問うている。

本来の目的を思い出そう

「なぜなぜ分析」というものがある。トヨタの大野耐一氏が開発したアイデア発想法で、なぜを5回繰り返して問題の本質を探るというものだ。傘をさす。なぜ傘をさすのか。雨に濡れないため。なぜ雨に濡れてはいけないか。服が濡れるから。なぜ服が濡れ

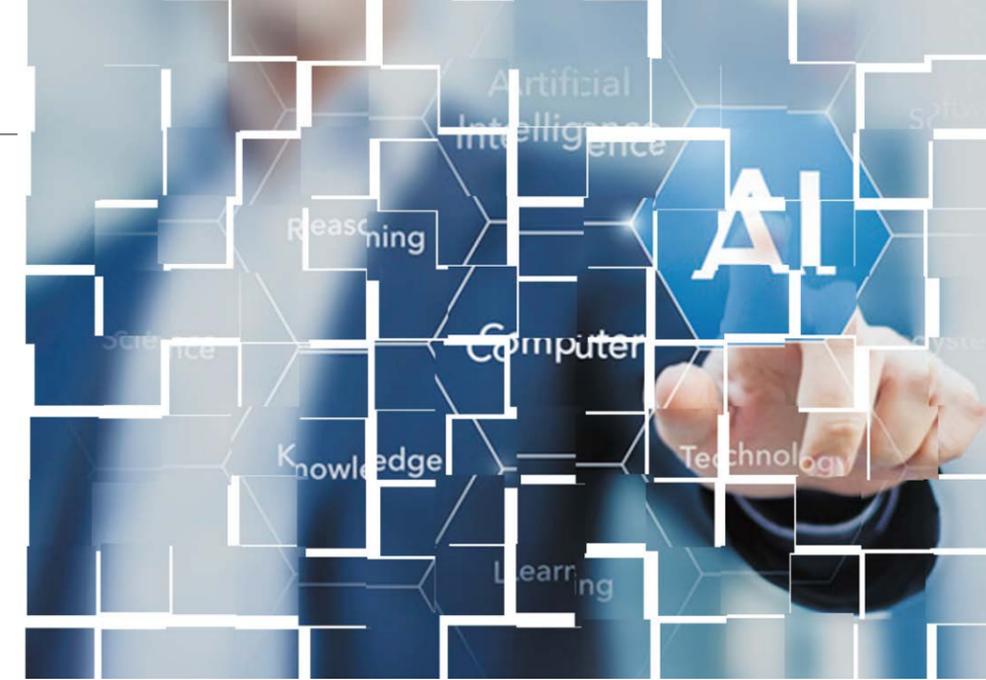
てはいけないのか。風邪をひく危険があるから。なぜ風邪をひいてはいけないのか。風邪は万病のもとだから。といった具合に分析を進めていき、傘に変わる防雨対策を考える。衣料の防水透湿性素材などはその成果の一つといえるだろう。濡れないことが目的ならば、水を通さない服を着ればいいのだ。つまり、開発で重要なのは本来の目的をしっかり把握すること。それが「The Best Interface is No Interface」の意味するところだ。

その流れからいけば、日本で普及している「おサイフケータイ」機能は「No UI」の精神にのっとっている。お金を払うためにすることは端末をポートにかざすことだけだ。しかし、まだかざすという行為は残っている。これがポケットに入れたままセキュアに支払い完了できれば、まさに完璧といえるだろう。

話題の「No UI」先行事例

同書では、いくつかの「No UI」先行事例が紹介されていた。

たとえば、Lockitronという、スマートフォンで世界中のどこからでも家のドアロックを可能にするアプリケーション。事前の作業として、既存のドアキー部分にかぶせて設置できるデバイスを取り



つけておく。スマートフォン側にはドアオープン、ドアクローズという2つのスライドボタンしかない。デバイスはセンサーを搭載していて、誰かがドアをノックするとスマートフォンに通知が届く。(https://www.youtube.com/watch?v=D1L3o88GKew)

VIPER SMARTSTARTという車操作スマートフォンアプリケーションは、車を足で軽く蹴ればトランクが開くという機能を実現した(https://www.viper.com/smartstart/)。そのためにはリアバンパーの下に2つのオプションセンサーを取り付ける必要があるのだが、このアプリケーションの初期購入者

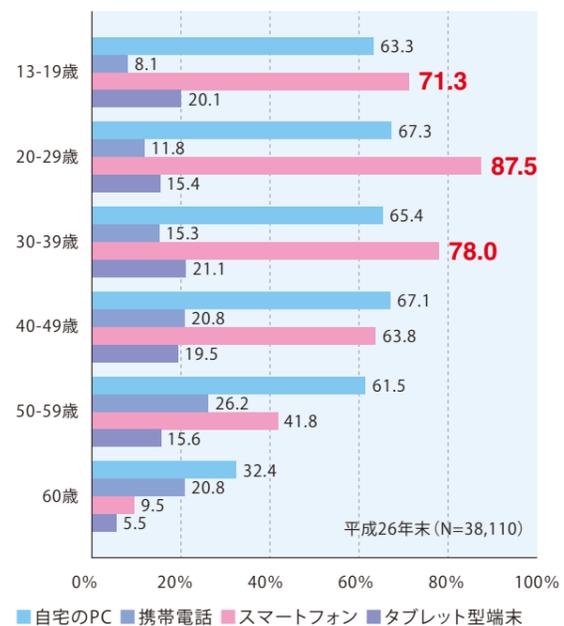
47%がこの機能を選択したそう。トランクの前にいるということは、何か収納したい荷物を手に抱えているということ。カーユーザーの行動をしっかり観察したからこそ生まれた機能だ。

これはスマートフォンアプリケーションではないが、人間の介在なしにすぐれた働きをする製品の例にReebok Checklightがあった。これはリーボックとベンチャー企業が共同開発したもので、見た目はシンプルなふちなし帽なのだが、加速度測定機能と姿勢制御機能を組み込んだ

基盤が埋め込まれている。これで頭部が受ける衝撃を測定でき、その強度を後頭部のLEDランプが示す。(http://www.reebok.com/us/checklight/Z85846.html) アメリカンフットボール選手など頭部に強い衝撃を受ける危険のあるユーザーには福音の新製品だ。スマートフォンが登場したおかげで、人は移動しながら誰かと交流したり、新しい洋服を購入したり、セミナーの申し込みをするなど、手のひらの上で多くのことができるようになった。時間を有効に活用できるという点で、これは真にイノベーションといえる。しかし、画面を見て操作するという行為にはマイナス面もある。「歩きスマホ」に起因する接触事故、転落事故はその代表例だ。

製品/サービス開発において、当該課題を解決するのにユーザーインターフェースとしての画面提供はほんとうに最善なのか。日本はまだこのような「No UI」を目指した製品/サービスの事例は数少ない。しかし、これは国や地域を問わない普遍的な課題で、潜在ニーズは高いと思われる。なぜなぜ分析までいかずとも、ユーザーエクスペリエンス、つまり、人間の体験が本質的にどうあればさらなるブレークスルーにつながるか、一度立ち止まって考える機会を持ってもらいたい。(C)

図1 年齢層別インターネット利用端末状況(平成26年末)



## サイボウズ社にワークスタイル改革を推進する 次世代コミュニケーション基盤を導入

風土改革・人事改革に取り組むサイボウズ社のオフィスからカスタマーセンターまで統合し、各コミュニケーションツールを連携させ、多様な働き方に対応した次世代コミュニケーション基盤を構築しました。それまでサイボウズ社では、電話やチャット等のコミュニケーションツールは複数のメーカー製品やツールを使用しており上手く連携ができておらず、またそれぞれ管理しなければならないなど運用上の負荷が課題となっていました。MKIは、ネットワークインフラ構築のみならずカスタマーセンター構築においても豊富な実績を生かし、シスコシステムズ社のソリューションで設計・構築を行い、様々なワークスタイルや業務に対応できるコミュニケーション環境を実現しました。

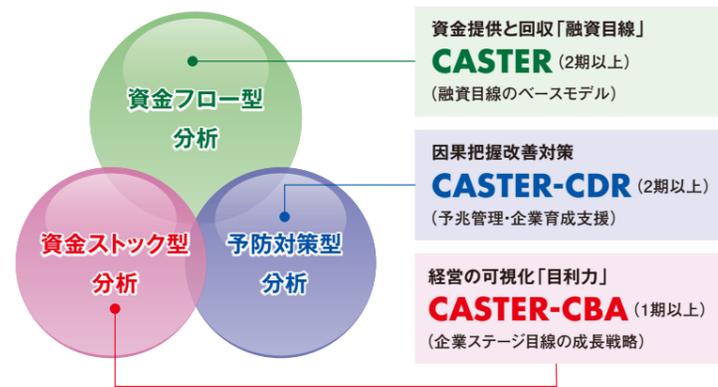


## 金融機関向けに企業の倒産危険度を分析し 予兆管理・企業育成を支援する「CASTER-CDR」を提供開始

独自開発の金融機関向け企業財務分析システム「CASTER」と連携し、対象企業の倒産危険度を分析することによって予兆管理・企業育成を支援する、「CASTER-CDR」を提供開始しました。

「CASTER-CDR」は、独自の指標に基づき行う倒産の予兆検知や、2期分の決算書だけでも分析できるなど分析機能が充実しています。金融機関は本製品で対象企業の倒産予兆管理を行うことで、企業に対しタイムリーに改善支援を行うことが可能となります。MKIは、資金フローの観点から企業の安全分析を行う「CASTER」、資金ストックの観点から企業の成長性・ライフステージ可視化分析を行う「CASTER-CBA」に加え、予兆管理・企業育成支援に向けたリスク評価分析を行う「CASTER-CDR」を拡充したことで、様々な目線からトータルで金融機関の与信業務、営業推進業務のサポートを行っていきます。

### ■ 分析のための決算書入力



## 三井物産は経費管理基盤としてコンカーを採用

三井物産が既存システムの保守サービス終了を機に、経費管理基盤としてConcur Travel & Expense®を導入しました。同社は本導入により、システム管理・メンテナンス負荷を軽減し、SaaSのメリットを活かした上で、コンカーから提供される法制度対応や、モバイル等新しい技術の更なる活用を目指しています。MKIはコンカーとアライアンス契約を締結済みであり、本システムの導入経験を生かしながら、既存の基幹システムとConcur Travel & Expense®を始めとする様々なクラウドサービスを連携させ、今後更にインテグレーション機能を発揮し、付加価値の高いサービスを日本企業に提供していきます。



さまざまな課題と向き合う企業担当者様のお悩みを、MKIスッキリストがすっきり解決します。今回の相談者は、店舗の設備管理を担当する施設部 S藤さんです。どうやら店舗の維持コストについての悩みをお持ちのようです。

店舗で発生する  
膨大な空調コストを節約したい!

施設部 担当者



相談者 S藤さん(以下、S藤さん)

私の働く企業は、日本全国に数多くの大規模店舗を展開しています。来店されるお客様に快適に過ごしていただけるよう冷暖房に配慮していますが、面積が面積だけに空調コストがばかになりません。経営層から「何とか削減する方法を探せ」と対策を迫られています。

MKIスッキリスト(以下、MKI)

当社にはエネルギー管理のための「GeM2」というソリューションがあります。

S藤さん もしかして冷暖房設備をそっくり入れ替えるのでしょうか。営業を休めないで、大規模な工事は不可能です。

MKI 心配はご無用です。「GeM2」は、既存冷暖房設備に専用アダプタを取りつけてシステムに接続するだけ。短期間・低コストで導入できます。

S藤さん 実際に当社と似たような形態の企業さんは利用されているのですか?

MKI シネマコンプレックス「松竹マルチプレックスシアターズ」様や、複合商業施設である「広島 ゆめタウン」様に導入いただいています。実際に運用していただいていることで、コストダウン効果を肌で実感していただいているようです。

S藤さん ただ…、コストダウンできればOK、というわけではないんです。当社はおお客様の快適性が最優先なので、それを損なってまでは実施できません。

MKI その点もご安心ください。「GeM2」は店舗

内を一つの空間として捉え、空調だけではなく、照明、換気扇まで含めて総合的にコントロールできます。売場カテゴリごとに温度調節、運転発停を行えるので、冷やし過ぎたり、暖め過ぎたりすることなく快適性は損ないません。電気、ガスなどのエネルギー種別、冷暖房設備も問いませんから、全社規模の省エネを容易に進めていただけます。まずは気軽にお声がけください。過去の実績などをお見せしつつ、ご相談に応じます。

### 処方箋

設備変更不要で、  
省エネ対策と快適性保持が  
両立できる

『クラウド型省エネルギー  
マネジメントサービス』で  
すっきりしましょう!

MKIスッキリスト



お問い合わせはこちらまで ▶▶▶ [http://www.mki.co.jp/inside\\_cube/askmki.html](http://www.mki.co.jp/inside_cube/askmki.html)



### 編集部・守屋の 編集後記

皆さま、こんにちは。近年ICTを活用した教育が盛んですが、今号は「子どもを守り育てるICT」ということで2件事例をご紹介します。そのうちの1件であるまちのてらこや保育園さんの

きずノートは、今まで子どもを「育てる」ために使われる教育現場のICTというよりは、「守る」ためにも使われるICTであり、ついに対象年齢が幼児まで広がった新しい取り組みと言えるのではないかと思います。

今回取材を快く引き受けてくださったまちのてらこや保育園さんにお邪魔したわけですが、生後6カ月のお子さんから引き受けているということもあり、非常に賑やかで楽しく、新鮮な体験をさせていただきました。それと同時に、この子はお布団で

寝かせようとするので泣いてしまうので、できるだけ抱っこで寝かしつける等、一人一人のお子さんの個性を把握し、適切に対応されている保育士の皆さんには頭が下がる思いでした。業界が違っても、プロとして働いている方のお話は刺激になります。誌面に載せられたのはごく一部ではありますが、皆さまの心に留まれば幸いです。